

大学史資料室

第26回展示

# 年史類にみる大阪市立大学



展示期間：2013（平成25）年8月～

展示場所：大阪市立大学学術情報総合センター 1階

大阪市立大学 大学史資料室

## 【第 26 回 大学史資料室展示】

### 年史類にみる大阪市立大学

会社や役所のように、教育機関も節目にあたる年には記念誌（いわゆる「～年史」）を作成し、設立の経緯やその後の変遷を記録にとどめ、先達の労苦を偲び顕彰・批判する作業を通して、自分たちもその伝統の担い手であることを再確認してきました。

大阪市立大学はいくつもの源流（いわゆる前身校）が合流して一つになり、総合大学として歩み始めましたが、前身校の多くもこのような年史類を編集しています。また、本学における質量ともにもっともまとまった年史としては、大阪商業講習所創設（1880 年）から 100 年を記念して計画・刊行された『大阪市立大学百年史』があり、現在でも本学の歴史を語る際に依拠すべき基本資料として、揺るぎない地位を占めています。大学史資料室もこの百年史編集を契機として設立された組織です。その後も 2007 年には 125 年史の編集が行われ、これらの蓄積を基礎として、主に学生向けに『大阪市立大学の 125 年－1880～2005 年－』『大阪市立大学の歴史－1880 年から現在へー』などが作成されて、自校史教育に活用されています。

また全学のみならず、研究科・学部あるいは教室単位などでも、年史やそれに類するものが多数刊行されています。これらの年史類は場合によっては書物という形態をとらないかもしれませんが、こうした事業は今後も途切れることなく続くことでしょう。

今回の展示では、このように長年にわたって書き継がれてきた本学に関する年史類を幾つか紹介しています。皆さんが本学あるいは各学部・研究科などの有する特徴や伝統を考える際のよすがとしていただければ幸いです。

2013（平成 25）年 8 月

大学史資料室

【なお、大学史資料室も本学に関連する全ての年史類を把握、収蔵しているわけではありません。情報をお寄せくださいますようお願い申し上げます。】

（※以下の文章中における年史類からの引用は、読解の便宜上、表記を現代かなづかいになおしてあります。）

## 前 身 校

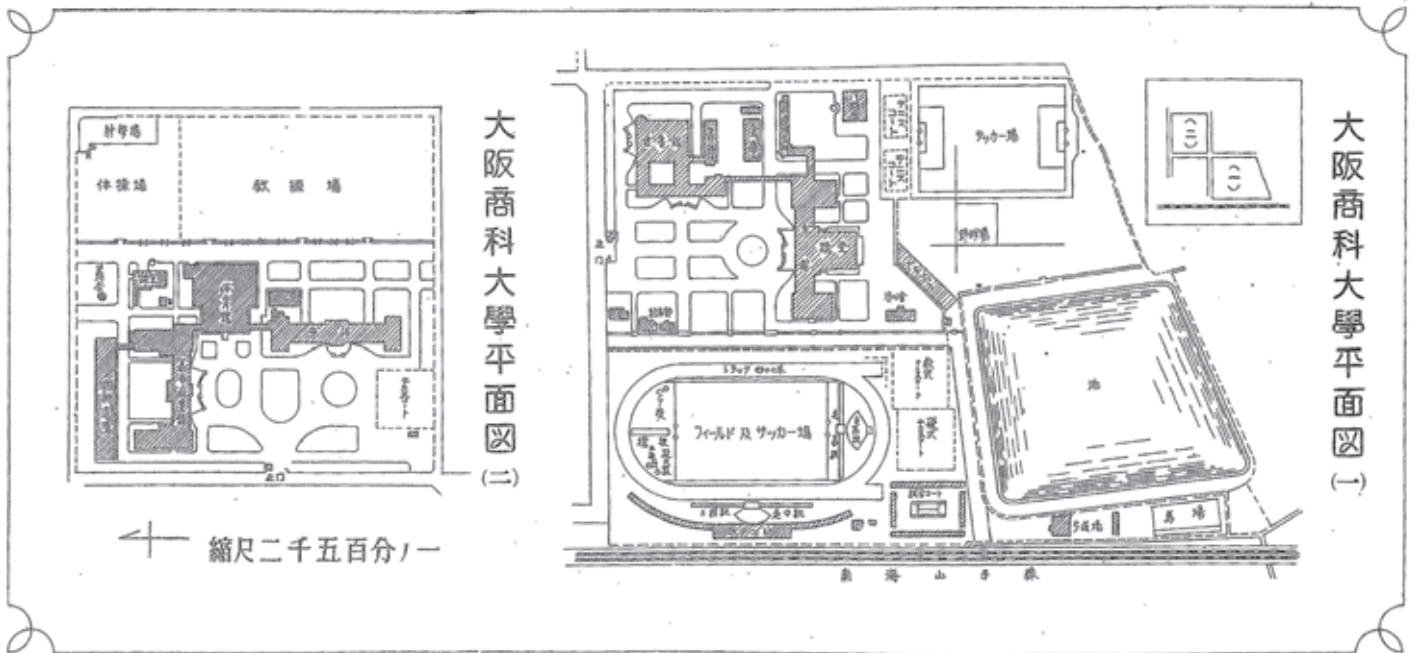
### 大阪商科大学の杉本町学舎建設

本学の前身校の一つである大阪商科大学が成立したのは 1928（昭和 3）年のことでしたが、ここ杉本町での学舎建設が開始されたのは、それから約 3 年後のことでした。『大阪商科大学六十年史』には、およそ 4 年間を要した当時のキャンパス整備の過程が、詳細かつ誇らしげに記されています。当時の平面図とともに現在と比較してご覧になると、興味深い発見がいくつもあると思います。

\*\*\*\*\*

かくて建築過程に入り、同年（昭和六年）九月三十日建築工事入札は鹿島組に落札し第一期工事たる高商

部予科校舎十月七日着手、十月二十七日起工式。七年十月ほぼ完成、十二月竣工。広闊な外気のなかにギャラリー・映写室附小講堂（六百人収容）・体育室・室内プール等の装備を誇る平家建石綿盤葺の体育館を中に挿んで、高等商業部本館は南面し、予科は西面し、共に鉄筋コンクリート三層の簡素な新校舎。八年三月予科は茶白山仮校舎から高商部は烏丘旧校舎から移転、四月六日から執務を開始。新学年をこの新校舎に迎えた生徒の意気は清爽。十日新校舎移転祝賀会を催した。同月体育館、武術練習場、予科高商部暖房汽罐室、射撃場竣工。春から初冬まで雲雀が啼上る明るい声をまきちらし、畑の中の泥濘を黒々と生徒の続く杉本町風景が現出し始めた。阪和（後の南海山手線）杉本町駅から周囲の堀が完成しない清新な新学舎迄の景である。一年ほどは向って右雲白い浅香山の翠黛を背にした草地に大学本館の鉄骨足場の工事進捗ぶりを眺めな



(図1) 大阪商科大学平面図 (『大阪商科大学六十年史』より)

がら。それも昭和九年七月完成した。学部本館・講堂・図書館・研究室・書庫・暖房汽罐室殆んど竣工、烏丘より移転しはじめた。七月二十五日御真影奉遷。その日移転全部完了したのである。かくて九月には完全竣工を見たが、同月二十一日未曾有の暴風雨新学舎をおそい、新装の硝子窓など被害深甚を極めたのは口惜しい。竣工祝賀会は一年延期となった。(中略) 新築工事の仕上げは翌十年二月、自動車車庫、守衛詰所、正門、倉庫、非常門、堀、柵、弓道場、大運動場等の外装施設総て成り、ここに大阪商科大学の外貌尽く竣工したのだ。南敷地(学部)一一萬三四三一平方米(三萬四三一三坪)と北敷地(予科及高商部)六萬〇一二二平方米(一萬八一八七坪)。全広袤一七萬三五五三平方米。五萬二五〇〇坪。正に五年の歳月を要している。

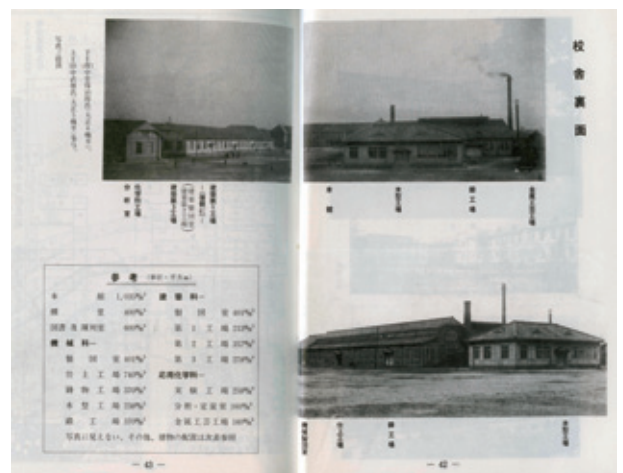
正門から前庭に歩み入ると、学部本館三層白館を中心とし時計台さやかにそびえ、そのまうしろは一四〇〇人を収容しうる平家建銅板葺大講堂完備を誇る。本館は渡廊下で研究室図書館に続く。それは五階建書庫を東南につけた二階建である。本学研究室は教授の個人研究室ではなく学科別協同研究室たる点に特徴をもつ。本館もここもいずれもあらあらしい直線美をあらわに、むしろ固く線づけており、渡廊下の東南に木造二階建の経済研究所がある。学部本館の西には大スタンドをもつ大運動場がひらけ、その南には弓道場・馬場があり、その西を画する塀に沿って大阪和歌山を繋ぐ阪和電鉄(後の南海山手線)の軌道が走る。馬場の東側は草土手をあがると用水池、学部の大講堂時計台がくっ

きりと見える。夏は学生生徒の自然プール。土手には春若木桜がちらつき、秋は吹き靡かう穂薄。南側を画する常緑松林帯を透して大和川の清流。運動場の旗柱に高く掲揚する国旗の旗風に金剛葛城の連嶺が蒼く濃い。

昭和十年十一月八日より三日間、新築学舎竣工式典が挙行され大学の外貌内容ともに成るの愉悦を天下に頒った。

\*\*\*\*\*  
「新学舎竣工」(『大阪商科大学六十年史』昭和19年10月1日)より

**大阪工業学校／社会的指導と学校の開放**



(図2) 市立大阪工業学校 (『“都の葦”第5輯・温故智新』より)

裏表紙の沿革図にもみられるように、現在の理学部・工学部の源流は1907（明治40）年設立の市立大阪工業学校まで遡ることができます。大阪駅北に敷地1万3千余坪、建物総坪数3千5百余坪を有し、当時としては希少なリリウム張りの部屋が幾つもあって「ハイカラ学校」と異名をとったそうです。入学資格は高等小学校卒業程度、修業年限四ヶ年というのも当時は全国に例を見ず、生徒もこれを誇りとしていたと記されています。この市立大阪工業学校が広く社会に対し、工業知識の普及と指導を明治期から実施していたことも特徴の一つとして掲げることができるでしょう。

\*\*\*\*\*

### 社会人に対し工業知識の普及と指導とに乗出す

本校は創設の初めから実験実習を尊重し、工業教育に特有な教育方針をとったのであるが、これを単に学校内に閉じこめた狭い教育に終らせないで、広く社会に向って積極的に門戸を開放し、工業知識の普及と指導とに数々の企画をしたのであって、終戦後の今日やかましく云われているこれらのことがらを、明治時代に於て既に本校で実施していたことを思うとき、堀居校長の識見の如何に深遠であったかが思われ、全く敬服の外はないのである。

社会に対して門戸を開放し、工業知識の普及と指導とに努めてきたことは数々あるが、そのうちの二、三を摘出すると左のようなものがある。

幻燈応用通俗工業講和会の開催  
工業質問箱の制定（中略）

### 幻燈応用通俗工業講和会の開催

これは本校教諭が交替で、斬新な映画図表などを作成し、幻燈を応用した通俗工業講和会を催して、広く市民に向って工業知識の普及につとめた具体的な表われの一つである。これは明治四十三年十二月から実施せられ、凡そ年三、四回程度行ったもので、毎回四百名から五百名の聴講者があった。

古い記憶から一、二の例を拾ってみると、大正元年十月一日行った第十一回幻燈応用通俗工業講和会では、宮崎教諭は磁石に就て講和し、中村教諭は数種の電気実験をなしているが、当夜の来会者は四百五十余名の多数に上った。又同十二月七日の第十二回幻燈応用通俗工業講和会では、斎藤教諭はセルロイド及び人造絹糸に就て講和し、野呂教諭は摩天楼の建築に就て講和をなしているが、当夜の来会者も四百五十余名と記録されている。その他、大阪市水道の話とか、昔の

建築とか、珍しい機械と面白い発明とか、天文の話とか…と云った課題を選んで工業知識の普及につとめたのであった。

### 工業質問箱の制定

大正二年五月二十一日の創立記念日を機として、本校では新しい試みとして本校図書室内に工業質問箱を設置し、一般営業者に対し、工業科に関する質問に応じ解答を与える制度をつくった。それが営業者にどのように活用されたかを知る一例として、この質問箱制定以後、十二月末日まで八ヶ月間に応答指導をなした件数並に質問者の人数を記すと次の通りであった。

- ① 件数 機械科 二八 建築科 三  
分析科 六五 家具科 二 計 九十八件
- ② 質問者人数 市内 二八 奈良県 二  
広島県 二 滋賀県 二 堺市 二  
朝鮮 一 東京市 一 愛媛県 一  
静岡県 一 熊本市 一 計 四十一名

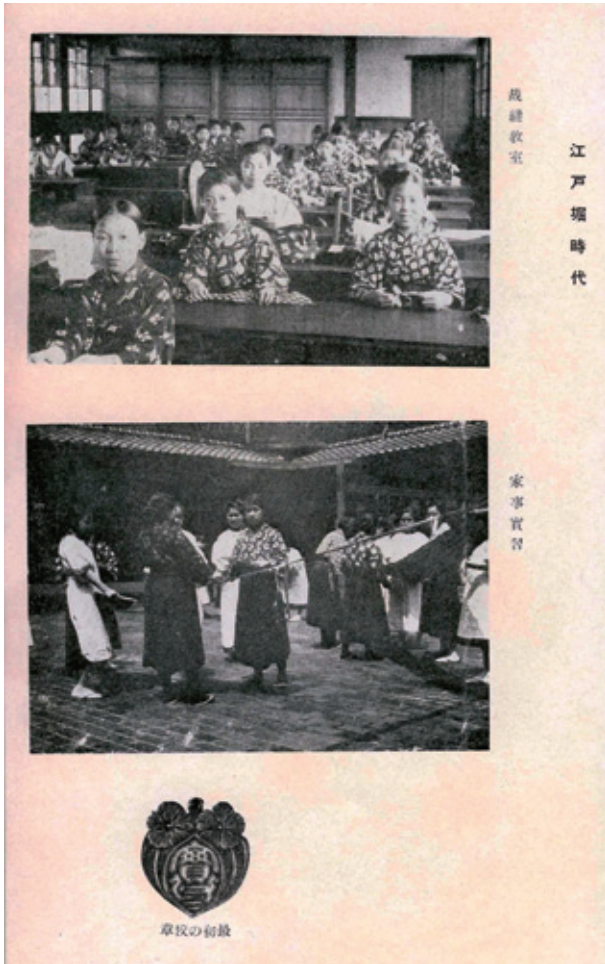
この工業質問応答に関する仕事は、その後年々活発になりいわゆる所期の目的は充分達成せられる方向を辿ったが、大正五年に至って本校内に市立大阪工業研究所が創設されたので、これに関する業務並に關係書類一切はそちらに移管せられることになった。

\*\*\*\*\*  
「社会的指導と学校の開放」（『“都の葦”第5輯・温古智新』昭和60年8月15日）より

### 生活科学部の源流

生活科学部の源流であり、1921（大正10）年4月に設立された大阪市立西区高等実修女学校は、同年1月制定の実業学校令中の職業学校規程に則って設立された最初の公立学校として知られています。同校はその発足にあたり最初の1年間、西区手芸学校跡の旧校舎（江戸堀校舎）を用いていました。翌年4月からは西区第一高等小学校跡地（立売堀校舎）へ移転し環境も整いましたが、この江戸堀校舎で学んだ当時の生徒の手記が発足当時の状況を偲ばせてくれます。

\*\*\*\*\*  
江戸堀といえば、すぐ江戸堀時代の事が思い出される。江戸堀時代といえば、又狭い、汚い校舎が連想される。どの様に汚くても、狭くても、やはり校舎は校舎



(図3) 大阪市立西区高等実修女学校  
 (大阪市立高等西華女学校『創立拾七年沿革略史』より)

であったに違いは無い。校舎であってこそ私達は一ヶ年も学んで来たのである。遊んで来たのである。毎日毎日通学したのである。狭い狭い、汚い汚いと今では一笑に附してしまうけれども、この校舎がどんなに思い出深いかしれない。

入学した当時には、本当に汚い、狭い校舎だと憤慨した。運動場といっても僅かな面積で、屋内の方は板敷であったし、屋外の方は煉瓦敷ではあったけれど、へこんだところや、破れたところ等もあって、体操の時に随分こまらせられた。体操の先生も「狭くてこまりますネー」と口ぐせの様に申して居られた事を私はよく覚えている。いいえ、先生ばかりではなかった。私達生徒も早く立売堀の方に行く様にと、明けても暮れても小鳥の様にさえずっていた。

又講堂といい、職員室といい、それはそれは女学校として恥ずかしい様な、狭苦しい貧弱なものであった。ある教室は畳の上に机を並べて、そして畳をふんで勉強する所もあった。

私はこれには随分驚かされた。土下駄をぬいで手をつくところ、食事をする畳の上を靴をはいて、しかも平気で踏むんですもの、私はどんなに貧しくなっても、こ

の様な真似はしたくないと思った。又講堂は今の様に立派な、大きなものではなかった。床下と天井とが、ひつつきそうになっていて、校長先生が教壇に上られると、天井と先生の頭とがすれすれ位になるし、椅子もグニャグニャで、今にもつぶされそうなのばかり、その椅子も足りなくて、後の方に直立姿で立ってお話を聞いた事も度々あった。

職員室は、何だかやはり暗くて、狭苦しそうで本当に先生達はお気の毒の様な気が致しました。この外、便所も随分古くなって居た。便所には木造りの下駄が十数足備え付けてあって、それをはいて行くのですが、その下駄が、石に或は木にあたって、カタンカタンカチンカチンと異様な音がして、その音を耳にする毎に私は旧劇を見に行った時の様な気がして、一人で笑った事もあった。又庭園といっても、ほんの数えるだけの木で、庭園で勉強することも、遊ぶことも出来ない位小さなのでした。

こうして、自分の思う事の出来ない校舎でしたけれど、私はこの校舎にいた時代が、一番一番楽しいうれしい愉快な心でした「よく遊び、よく学べ」といった格言が、自分一人に与えてくれた様な思いがした位懐かしい校舎でした。

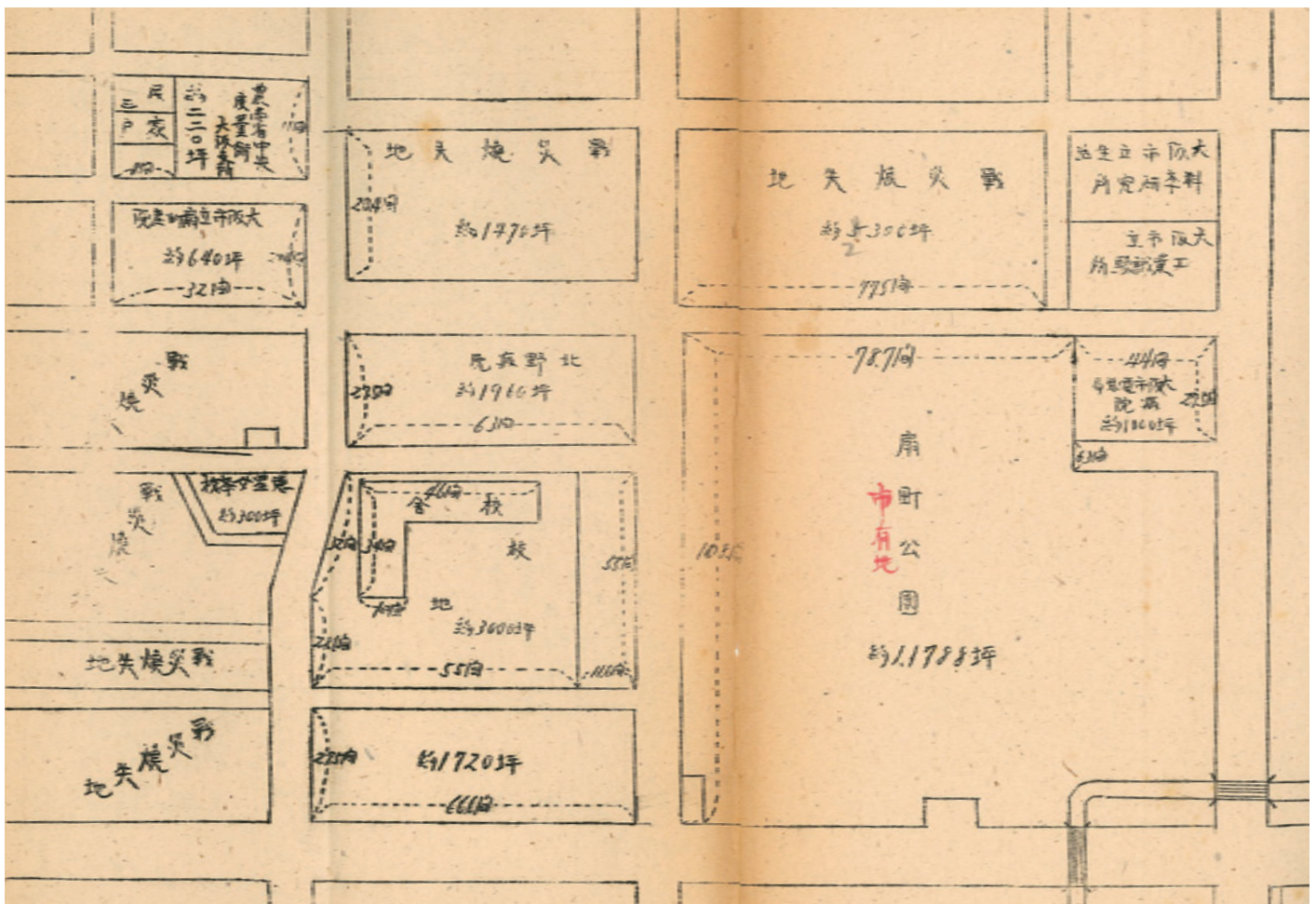
\*\*\*\*\*  
 「江戸堀時代」(大阪市立高等西華女学校『創立拾七年沿革略史』昭和12年11月18日)より

### 戦中の市立医専

医学部の前身校である大阪市立医学専門学校は、1944(昭和19)年4月、当時の戦線拡大による軍医供給の要請に応えるべく、大阪市立扇町商業学校内に設置されました。戦況が悪化し、軍需工場への動員や学徒出陣が常態となるなか、医科のみは辛うじて授業が存続していたことから、多くの学生が進学を希望しました。『大阪市立大学医学部20年記念史』には、医専第一回入試の状況と当時の学園内の雰囲気につき、次のように記されています。

\*\*\*\*\*  
 昭和19年の高専入試をかえりみると、第三高等学校では文科1.8倍に比して、理科は5.7倍、就中理科乙類(医科志望)は10.3倍を記録。新設とはいえ、大阪市立医専も定員120名に志願者3,009名が殺到した。

ひっばくした当時の新聞紙面からは、高専入試の競



(図4) 終戦直後の市立医専付近の状況図 (『大阪市立医学専門学校概要』昭和21年3月より)

争率などうかがい知れるわけもなく、3月9日午前8時、指定された扇町商業の校門をくぐったとたん、運動場一杯にひしめく受験者の大群に、はや戦意を喪失させてひきかえす者も続出。

2日間の学科試験は、国語、国史、数学、理科物象で、英語は敵国語というのでなかった。出題は当時の大阪市教育部で、採点もその部内の人達であった由。そうして実受験者は2,694名、採用者126名、入学率21倍であった。

19年4月20日の入学式に引続き、ただちに商業学校普通教室2つをぶちぬいた2階南側の合併教室で、ぎっしり詰めこまれた生徒に、初の講義解剖学が「細胞とは…」と堀井講師によって開始された。外国語、生物、数学、物理などは2クラスにわかれてきいたが、解剖、生理は合併授業。朝8時から午後5時まで、2時間単位で4時限の強行授業に耐え得たのは、戦時下であるという意識と、サボるにも何にも、食う物もみる物もない殺風景の中では、せめても昼の給食パン(のちにはカレーライス一杯になったが)をたのみに朝から夕方までの学園生活を忠実に送るより手はなかった。

ただ当時の風潮の中で、まことにのんびりした自由放任的な、ある意味ではしまりのない空気が学園の中にあつたことは、当時の生徒の誰もが追想するところで、たしかに朝8時から夕方5時まで、ぶつづけの突貫授業ではあつたが、それ以外の時間は全く自由至極。戦時下学徒たるものは……、と口をひらけばゲートルを巻けの、タバコをのむな、髪をのばすな、教練をサボるな、しっかりしろ、緊張が足らんと、小うるさいいわゆる指導者の命令と看視が当然すぎた時代に、少くとも学校当局から服装その他の私行為について、訓辞がましいことを聞いたおぼえはない。

そういえば、配属将校と申すシロモノにお目にかつたことがないなと述懐する者もある。これは責任者である校長の赴任がおくれたので、一種の無責任状態が当局にあつたのかと感づってみても、小幡校長着任後も一向に「きたえられた」記憶もない。殺伐とした灰色の当時、僅かにのんびりした私的生活をもてたことは、一種の奇蹟にぞくしたことである。

\*\*\*\*\*  
「戦中の市立医専」(『大阪市立大学医学部20年記念史』昭和40年7月25日)より

## 経済研究所の創立



大阪商科大学烏ヶ辻校舎（天王寺区烏ヶ辻町）、経済研究所、昭和3年～10年入居、昭和3年撮影



旧経済研究所棟（杉本町キャンパス内・現生協専門地区建物地、昭和10年～20年入居）、撮影年不明

（図5）（『大阪市立大学経済研究所概要  
—創立60周年を記念して—』より

\*\*\*\*\*

現在の大阪市立大学経済研究所の前身である大阪市経済研究所（大阪商科大学経済研究所）は、1928年（昭和3）8月1日に創立された。

それまでの経過をふりかえると、欧米の諸大学にみられるような、研究活動に専念できる専任スタッフをもつ研究所を設置しようという計画は、大正末年、旧制大阪商科大学がまだその前身の大阪市立高等商業学校であった時代に生れ、大阪高商から大阪商大への昇格の時を期して、この構想を実現することが企図されていたのである。

大学昇格の機が熟した1927年（昭和2）、現在の野村証券株式会社や大和銀行などの創業者である野村徳七氏（1878—1945）から大阪市に対し、学術研究機関の設立に充当するよう指定のうえ100万円の寄附申出があった。そこで当時の関一市長はじめ大阪市当局は、大阪高商および寄附者野村徳七氏に諮って、この

寄附金を大阪商科大学（このときすでに大阪高商は1928年4月1日に大阪商科大学に昇格することが予定されていた）に附置すべき経済研究所の設立費用にあてることとし、同年10月11日、市会の協賛を経てこれを収受した。

ついで1928年7月14日、大阪市会において経済研究所の設置および同規則が議決され、7月30日には大阪商科大学学長河田嗣郎が所長事務取扱を囑託された。こうして8月1日、天王寺区烏ヶ辻の大阪商大学舎内に仮事務室を設け、創設事務を開始するに至ったのである。

新設された経済研究所の正式の名称は大阪市経済研究所であって、制度上は工業研究所、衛生研究所、美術館などおなじ市の事業所の一つであった。しかし「経済研究所規則」第1条には「大阪商科大学ニ経済研究所ヲ附置ス」とあり、市の事業所の一つが大学に附置されているというやや特殊な形となったのである。したがって研究所は対外的には大阪商科大学経済研究所という名称を用いたが、これもまた正式な名称であった。

では、経済研究所は、その発足にあたっていかなる使命をみずからに課したか。創立早々の1929年（昭和4）4月に刊行された『大阪商科大学経済研究所概況』は、その冒頭に「本所の使命」と題して、次のように述べている。

「凡そ経済現象の考察を為すに当っては、理論的討究を怠ってはならぬこと勿論であるが、それと共に、事象そのものの精密にして確実なる認識と、その変動推移の状況を明にする実証的なる調査研究も、亦欠くべからざる所である。……我研究所は、一方には努めて豊富に資料を蒐集し整理すると共に、他方同時に之を活用して、最も自由な立場から各方面の経済問題を、なるべく実証的に攷究し、或は雑誌上の論文として或は又単行本として、世に提供することを任務とせんとし生れたものである。尚又、資料を学者及實際家に公開して、其調査研究上の便宜を図ることをも任務とせんとするものである。」

ここにみられるように、種々の経済問題の実証的な調査研究、その基礎となるべき諸資料の収集・整理、これが研究所発足にあたっての2大目標であり、研究所の活動を基本的に特徴づけるものであった。

\*\*\*\*\*

「経済研究所小史」（『大阪市立大学経済研究所概要—創立50周年を記念して—』昭和53年11月）より

## ■ 経営学研究科

### 商学部創立五十周年記念誌『商海への船出』

君たちの大先輩が、14年前に、当時の商学部の卒業生や現役学生について様々な評価を、赤裸々に語っています。さて、当時の評価、苦言、提言は今の君たちにも当てはまりますか。学生気質は14年の時を経て変わってないのかな、それとも!



(図6)『商海への船出』表紙

### 経済学部 50 周年記念誌『マーキュリーの翼』

経済学部は、1999年の創立50周年を記念して編集された記念誌である『マーキュリーの翼』を展示した。「編集後記」には、同誌の2つの特徴として、経済学部の「知の脈脈」を明示して新たな「知の創造」へとつなげること、および、外部の専門家による大阪市立大学経済学部評価を掲載していること、があげられている。現在では故人となった、都留重人氏（一橋大学名誉教授）、森嶋通夫氏（ロンドン大学・大阪大学名誉教授）などからの辛口のコメントも含まれている。このような批判的評価を記念誌に掲載するのは珍しいことであり、経済学部の自由な雰囲気を示しているといえる。

ところで、記念誌の表題の「マーキュリーの翼」とは、言うまでもなく、現在の学章のデザインに使われている、ギリシャ・ローマ神話で商業の神として知られるヘルメス=マーキュリーが具えていた翼のことである。大阪市立大学の学章は、前身校の1つである大阪商科大学の学章をベースにして考案されたものであるが、「マーキュリーの翼」は、一橋大学の前身である東京高等商業学校の校章を始めとして、全国の商業系の高等教育機関で広く用いられたデザインである。本学の学章については、広島大学高等教育研究開発センターの「全国校章大学めぐり」（第8話「マーキュリー（ヘルメス）の翼に乗って」）が、次のように記している（岩手大学大川一毅氏の資料に基づく）。

#### 「飛躍の商都に市民の大学」

大阪市立大学の学章も「マーキュリー」の翼。大学の歴史は、1880（明治13）年に五代友厚をはじめ当時の大阪財界有力者十六名で設立された「大阪商業講習所」から始まります。（中略）そして1928（昭和3）年、単科大学ながら学部・予科・高商部を構成する市立「大阪商科大学」が誕生しました。大阪商大は、官立の東京商大、神戸商大とあわせて「三商大」と呼ばれました。1929（昭和4）年に大学学部が開設され、その校旗奉戴式の際に、「商大」の文字を中央にして、両側には「マーキュリー」の翼が配置されたデザインが披露されました。これを基本にして、現在、公立最大級の総合大学に発展した大阪市立大学の学章も、「大学」の文字が大阪市章「みおつくし」と「マー

\*\*\*\*\*

#### 三・大阪市大卒業生への評価

- 大阪市大の学生はまじめでおとなしい。それは社会に出たら、欠点にしかない。
- 就職という目標に向かって真剣に勉強に取り組み、成績も良い市大女子学生。どうした男子。
- 入社試験。筆記はいいが、面接は駄目。もっと元気を出して発言しなくては、他大生に勝てない。
- 市大生の“まじめでおとなしい”を直す手段として、ディベートの訓練が必要だ。

\*\*\*\*\*

（大阪市立大学商学部創立五十周年記念誌『商海への船出』（平成11年11月14日）190～192ページの見出しのみ抜粋しました。）



キュリー」の翼に支えられています。「市民の大学」という誇りと飛躍が感じられる美しい学章です。

ずいぶん高い評価をいただき、ありがたいことである。なお、『大阪市立大学百年史（全学編）』464～465ページには「市大学章のルーツ」が記されているので、参照して下さい。



(図7) 広島大学高等教育研究開発センターホームページ「全国校章大学めぐりー第8話 マーキュリー(ヘルメス)の翼に乗ってー」を参考に作成

卒業生が多く、またいわゆる「労働弁護士」が多いという定評を得ているのも学生層のこうした特色を背景としてできあがったひとつの個性ではあろう。しかしこうした特色は、当然のことながらなにも「労働弁護士」の育成を重視するような狭隘な理念にたった教育が本学部で行われたことを意味はしない。いかなる価値観や立場にたとうとも、またいかなる場所においても通用するような法律学、政治学の成果を追求する教員集団の努力が、これをうけとめる学生の主体的な特性と結びついて、自ずとこのような特色ある学部をつつたのであろう。

もちろん教員集団ひいては教授会にも、それなりの特色・個性がそなわっていないわけではない。予算や人員の面で大きな国立大学の法学部に比べて劣った条件にある本学部が、普遍的な、すぐれた学問をつくるためには、最大限にひらかれた態度で有為の人材を集め、最大限に自由な研究、教育を保障する雰囲気育てる以外には方法がなかったとさえいえる。近年法学部を退職したある教授は、「考えてみれば市大法学部はこれまで実力以上の人事をしてきたものだ」と述懐された。そうするためには学閥・派閥を排し、イデオロギーの壁をとり去り、あらゆるところからあらゆる人材を、ともかく「学問さえできれば」うけいれるという「八方破れ」的な自由さに徹するほかはなかったのである。ただし、こうした自由さは決してお互いに疎遠な「砂のような」教員集団をつつたのではなく、この「八方破れの自由」を何にもまして大切と考える研究者同士のゲマインシャフトリヒな関係も培われてきたのであり、このゲマインシャフトが本学部の独特の自由さを守り伝統化してきた力であったといえよう。本学部の独特の自由さは、また大阪市という設置者および地域的背景とも無関係ではない。日本の近代都市のなかでももっとも活力に満ち、自由と自治の気風に富んだ大阪市と市民の寛容さや在野精神が、いわば「官学」にも「私学」にもない学問の土壌を提供してくれたのではなからうか・・・(中略)

自由な教員集団と経済的には恵まれないながらもバイタリティーに富む学生集団、それに少人数ながら官僚臭のない有能な職員集団—この三者が育ててきた本学部の特色はローカリズムを追求することで得られたものではないが、しかし大阪市を背景とした公立大学ならではのものではあったはずである・・・(後略)』

こののち本節は、「市大法学部が『何の変哲もない法学部』になることは、将来における本学部の可能性を狭く閉

## 法学研究科

### 学部の個性と伝統

以下の文章は、『大阪市立大学法学部三十年史』(1983年)のなかの一節「学部の個性と伝統」(P.148～150)から抜粋したものです。

\*\*\*\*\*

『・・・本学部の学生には伝統的に貧しいながらバイタリティーにあふれた若者が多かったといわれる。安い学費、アルバイト紹介など活発な学生援護活動、大阪の下町という立地環境などが、自ずから本学全体を貧しいながらも有為な青年達の学府たらしめたのであろう。・・・本学部出身の弁護士に、第2部(夜間部)の



(図8) 元法学部研究室(現学生サポートセンター)  
〔『大阪市立大学百年史・部局編』より〕

ざすことを意味する。この可能性をひろく豊かなものとするためには、本学部らしい特色や個性を打ち出しえてきた条件を大切に守り、新たな環境下で生かす方法を考えなければならない」という趣旨の文章で締め括られます。この文章が書かれてから、さらに約30年の歳月が流れました。上記のような個性や特色は今も受け継がれており、本学部は『何の変哲もない法学部』になってはいないと信じていますが、先達の自負に触れるとともに、皆さんもその伝統の担い手であり挑戦者であることを、あらためて確認していただければ幸いです。

## ■文学研究科

### 2013年……今年が文学部創立60周年

文学部では、『文学部三十年史』、『明日への飛躍』(文学部創立50周年記念誌)を展示しています。2013年は文学部創立60周年にあたっており、8月28～30日の上方文化講座や12月6～8日の国際シンポジウムなどさまざまな記念事業が予定されています。

10年前の創立50周年の時には、さらに大規模な記念事業が取り組まれました。その一つが2003年7月20日の国際シンポジウム「再発見 都市大阪のこころと文化」です。写真は、その内容を報じる同年7月27日付の朝日新聞です。50周年記念事業としては、このほかに、現在の文学部・文学研究科の教育に大きな意味を持つようになっている文学部・文学研究科教育促進支援機構の設立や、文学研究科叢書の創刊などがあります。

また60周年記念事業として例年より規模を大きくして開催される上方文化講座も今年が10回目であり、第1回は50周年の気運の中で始まったものでした。



(図9) 文学部創立50周年記念国際シンポジウム  
「再発見 都市大阪のこころと文化」  
(2003年7月20日 於大阪国際交流センター)

## ■理学研究科

### 理学部・理学部附属植物園の創設のころ

理学部には「年史」はなく、理学部創立50周年を記念した『軌跡と展望』や理学部附属植物園創立50周年記念の『未来・輝き』などがあります。下の2つの文章は、それらの中の吉良竜夫先生(本学名誉教授・元理学部長・元植物園園長)の文章からそれぞれ抜粋したものです。また、写真は創立当時の植物園の様子です。1949年の創設当時(植物園は1950年)の様子や2008年にノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎先生(本学栄誉教授)の着任時のことなどが窺えます。

「市大との最初の出会、1949年6月1日の入学式の印象は、まだ記憶に新しい。芦原橋近くに焼け残った小学校校舎二階の講堂には窓ガラスがほとんどなく、雑草の生い茂った焼け野原をわたる初夏の風が心地よく吹きこんできた。このとき初対面の初代理学系教授たちの平均年齢は38歳、私は最年少の29歳で肩身が狭かった。やや遅れて年下の南部陽一郎さん(理論物理)が着任したときは、ホッとした。」

『軌跡と展望—理学部創立50周年を記念して—』(1999年10月)3ページより抜粋

「用件は思いがけないもので、大阪市所属の交野市私市の農事訓練所の土地と組織を大学附属の植物園にしたいが、創設を引き受けてくれないかという打診だった。(中略)当時の農事訓練所には、いま多肉植物やヤシの類の植えこみになっている広場の上に茅葺きの事務所と大きな講堂、それに作業棟と小さな実験棟があった。」

『未来・輝き—植物園創立50周年記念—』7ページより抜粋



(図 10) 理学部附属植物園 (創立当時) (『未来・輝き  
—植物園創立 50 周年記念—』より)



(図 11) 理工学部創設当時の北学舎 (扇町校舎)  
(『大阪市立大学の百年』より)

## ■ 工学研究科

### 工学部発足までの道のり

以下の文章は、『大阪市立大学百年史 部局編・上』(1983年)及び『大学の歴史:大阪市立大学工学部』(1986年)から抜粋したものです。

\*\*\*\*\*

『大阪市立大学工学部の沿革は、その源を 1943 年(昭和 18)の大阪市立都島高等工業学校の創立までさかのぼることができる。さらにその母体の都島工業学校の起源をたどると 1908 年に創立された市立大阪工業学校に至り、大阪商業講習所創立から 28 年後である。大阪市は商工業の中心であり、また西日本の文化の中心としてわが国の発展に大きな役割を果たして来たが、「浪速工業会」を核とする都島工業学校の高等工業への昇格運動が、既に昭和初期からあり、それが第 2 次世界大戦末期のきわめて厳しい諸条件の下で、わが国の深刻な高級技術者の不足を補う目的を兼ねてやっと実を結び、土木、建築、機械、電気の 4 学科からなる都島高等工業学校が設立されたのである。ところが 1945 年に都島工業専門学校と改称した直後に第 2 次大戦は終結し、翌 1946 年の学制改革により、いわゆる 6・3・3・4 制のわく外に置かれた専門学校は早くも自然消滅の危機を迎えることになった。しかし当時の教職員、学生、卒業生が血判を押した嘆願書をつくるなどして熱心な努力を続けた結果、大阪市は工科大学への昇格を考えるに至ったが、結局は他の大阪市立の商大、医専、女専などと合わせて総合大学を設置し、その中に理科系を包含した理工学部という形で存続することに落ち着いた。このことについては、(後に初代理工学部長となる)大阪大学理学部教授小竹無二雄(有機化学専攻)の「理の基礎の上にたった工」の理念がきめ手となった。』

(以上、百年史 p.583 より)

『理工学部は、理学に十分な基礎をおいた工学部という特性のもとに、将来も理工分離を考えない一体としての「理工学部」の理念をもって(1949年(昭和 24)に)設置された。ここでは理学的基礎科学と工学的応用科学を有機的に結合するという高い創造的理想のもとに、学科の別を設けない自由選択カリキュラム制の採用、これまでの常識を破る 1 講座 6 名の定数、教員の任期制、思い切った若手研究者の登用などが試みられ、有力新鋭の教員が次々に参集した。』

(以上、大学の歴史 p.124 より)

『カリキュラムは完全な自由選択制で、境界領域を志望する学生はコースの別なく自由に受講科目を選ぶことができた。卒業のさいは、本人の希望によって理学士・工学士のどちらの称号を受けてもよいことになっていたが、これはのちに文部省から強い規制を受ける第一の原因となった。』

(以上、百年史 p.474 より)

『・・・1955 年ごろ、工科系の土木、建築分野から「理工学部卒業では取得単位が不明で就職に不利」であるとの声上がり、また全体的に工科系学科の中に「工は単なる理の応用ではない」との学部長への反発、人員や予算・設備の充実をはかりたいという要望が強まり、理工分離の気運が高まってきた。・・・結局 1959 年 4 月に理工学部を理学部と工学部に分け、前述(機械工学、電気工学、土木工学、建築学、応用物理学、応用科学)の 6 学科で構成される工学部を創設する・・・』

(以上、百年史 p.586 より)

\*\*\*\*\*

在日米軍に接収されていた杉本町学舎の全面返還(1955年)の後、大学全体の杉本地区への統合の動きの中で、工学部は 1964 年～1966 年にかけて現在の工学部学舎に移転し、我々が慣れ親しんできた現在の姿が実現されました。

## ■生活科学研究科

### 『生活科学部の五十年』と災害支援

生活科学部では、生活者の視点から災害に向き合い、支援を行ってきました。『生活科学部の五十年』（1999年10月）から、災害支援に関する記述をピックアップしました。

\*\*\*\*\*

- 岡村重夫「しらがばし回想 / 歴代学部長が綴る生活科学部の50年」(p27)

1950年秋と言えば、有名な「ジェーン台風」である。大阪市南西部は、大雨と高汐のために長期にわたって浸水被害を受けたが、家政学部も床上60～70cmの床上浸水の被害を蒙った。大阪市民政局は、被害地域の各所に「臨時幼児預り所」を設置したが、その呼びかけを受けて、当学部でも有志学生諸君が協力することになった。休暇中であったが、市大1・2回生、女専3回生の集会を求めたところ、早速その翌日からボランティアとして援助することになった。

毎日午前8時、「しらがばし学舎」でトラックに乗ってもらって、各所預かり所に学生を配置し、午後4時に同じトラックで学校に帰ってもらうことにした。初日には、「他所行きの服」を着ていた学生が、翌日には作業服姿に変わったのは、学生にとっては現場経験からの学習になったのではないか。

〔女専：大阪市立女子専門学校 しらがばし学舎：西区白髪橋付近にあった当時の学舎〕

- 「社会福祉学講座 / 人間福祉学科」(p120)

1995年は、阪神淡路大震災に世間が揺れ動いた年であったが、社会福祉学講座では秋山教授を中心に、学生および教員のボランティア活動を組織した。約半年間に、本学を含め13大学、延8,900人の学生が活動した。社会福祉学講座には「関西福祉系大学救援グループ」の事務局が設置され、関西の福祉系大学の学生の連絡調整にあたった。これは社会的にも大きく評価され、翌年菅直人厚生大臣から感謝状を授与された。

また、この活動は日本社会事業学校連盟の支援を得ることになり、秋山教授は、日本社会事業学校連盟阪神大震災対応特別委員会の委員長として、学生の活動の支援にあたった。これらの活動は、山縣助教授、さらには家族社会学講座助手の岩間伸之などとともに『福

祉系学生はどう動いたか：阪神大震災活動報告』としてまとめられ、日本社会事業学校連盟から刊行されている。また、震災関連では、大阪府社会福祉協議会の委託を受けて『震災とボランティア：阪神・淡路大震災ボランティア活動調査報告書』などもとりまとめている。

\*\*\*\*\*



(図12) 阪神・淡路大震災におけるボランティア活動  
(『生活科学部の五十年』より)

## ■医学研究科

### 医学部のシンボル「三女神像」がつくられた経緯



(図13) 医学部学舎の「三女神像レリーフ」(撮影：三木幸雄)  
向かって右から本を抱く「智」、薬壺を持つ「仁」、  
月桂樹を腕にする「勇」の女神

大阪市大医学部学舎の玄関には、医学部のシンボルとして、智・仁・勇を現した三女神像(写真)が設置されています。この三女神像は医学部関係者は誰でも知っていますが、誰の発案でどのような経緯で作られたかについては、意外にあまり知られていません。『大

阪市立大学医学部 20 年記念史』(昭和 40 年 7 月 25 日発行)の、熊谷謙三郎先生の「大阪市立医科大学長時代の想出」(161 ページ～164 ページ)に、三女神像作成の経緯が記されていますのでご紹介いたします。

\*\*\*\*\*

一言附言したいことは、3 人の女神のリリーフをつくったことである。私は医科大学のシンボルとして、何かつくて学生に示し度いと思ひ祭原事務局長とよりより相談した結果、医学には是非必要な智、仁、勇の 3 つを現した女神をつくる事にきめ、大阪府下出身の名彫刻家山畑阿利一氏に一任し出来上がったのが現在のリリーフで、専門家の間ではすばらしい名彫刻だと誉めてくれている。価格は当時の金で 20 万円、この案を教授会に出せば必ず反対、20 万円は分け取りにされる公算が多分にあったので、予算をもつ自分が独断でやったことは申訳ないが、これも医学部の特色としては決して悪くはなかったと今でも思っている。

\*\*\*\*\*

平成の今でも、当時の医科大学長の「独断」は英断であり、「決して悪くはなかった」と思われます。

(大学史資料室注記：かつて基礎学舎西北壁面にあった女神像は、基礎学舎の建て替えに伴い撤去されました。現在の三女神像(図 13)はレプリカです。)

## ■看護学研究科

### 夜間進学課程(第 2 部)の設置と廃止

以下の文章は、黒田始奈代(第 2 部教務主任)「創立 30 周年によせて—第 2 部 15 年を顧みて—」(大阪市立大学医学部附属看護専門学校『創立三十周年記念誌 昭和五十三年』1978 年 10 月 20 日)からの抜粋です。修業年限 3 年の夜間定時制は 20 年後の 1983 年(昭和 58)年 3 月にその役割を終え廃止されましたが、その間総数 510 名の卒業生を送り出しています。

\*\*\*\*\*

当看護専門学校第 2 部は、昭和 38 年 4 月、厚生学院(現第 1 部)に、夜間進学課程として併設され、定員 30 名で発足された。

当時、医学の進歩に伴う看護業務の複雑化と医療施設の増加に伴う看護要員の需要がますます高まる中で、看護婦は増加をみず、質的にも看護婦と准看護婦の比



(図 14) 看護専門学校戴帽式

(『大阪市立大学百年史・部局編』より)

率は、基準看護の線を保つことが困難な状況であった。

このような時期に、大阪市に進学コースが全然無く、進学のために退職する者が多く、また在職中の准看護婦の中に進学を希望する者が多数あった。そのため、在職のまま勉学をさせ、看護要員を確保しつつ、かつ看護の質の向上を計ろうと、一石二鳥を狙っての夜間進学課程の開設であった。

夜間進学コースは、昭和 37 年 9 月に設置されたばかりで、当時、全国的にも数校の開設のみで、その上、大阪においては初めての試みだけに、初代教務主任をはじめ、各関係者の方々のご苦勞はいかばかりであったかと推察できる。

それ以来、第 1 部の半分とはいえ、15 年を経過し、13 期生 362 名の卒業生を送り出したが、卒業生達も色々な分野で、中堅となって活躍してくれている。(中略)

その間、入学生の背景も時代の流れと共に大きく変化してきた。発足当初は、准看護婦免許取得後、実務経験を積んだ上で入学してくる学生が大部分であったが、最近では、高校衛生看護科の卒業生の増加と共に、実務経験ゼロで就職と同時に入学する学生が増え、入学当初は勤務に慣れるのが精一杯で、学業と勤務の両立には、非常に無理がある学生が多い。その反面、少数ではあるが、年齢・実務経験等の非常に高い学生もおり、基礎学歴・年令・実務経験等の異なる学生と一緒に教育しなければならない進学課程(定時制)の教育のむずかしさを痛感している。

また、最近の傾向として、全国的に進学コースが非常に増加しているが、特に大阪府下の増加が著しい。それに伴い、大阪府下においては、この 2～3 年、特に夜間進学コースの志願者数が各校共減少している。これは、学校数の増加にもよるが、高校衛生看護科の卒業生が高校卒業と共に、専攻科・短大への進学また

は、全日制2年課程への進学希望者が大部分で、働きながら学ぶコースを選ぶ者は非常に少なく、特に夜間は敬遠されるようである。

今まで、夜間進学コースが果たしてきた役割は大きい、このような社会の変化の中でその存在意義が問い直される時期にきているように思われる。

\*\*\*\*\*

## ■都市健康・スポーツ研究センター

### 中川敬「<sup>たこ</sup>章魚足学舎時代の回顧と退職の弁」

戦時中、商大学舎の半分以上を大阪海兵団が使用していました。敗戦後、杉本学舎すべてが米軍に接収されたため、1949（昭和24）年に創立された新制大阪市立大学は、1955（昭和30）年の全面返還まで、市内各地の小学校校舎に分散を余儀なくされました。当時の市立大学は商、経済、法文、理工、家政の5学部から構成されていましたが、保健体育科は法文学部に所属していました。



(図15) 当時、学舎返還運動をしていた学生作成のアルバム（昭和29年）より

〔池田克彦氏編集、葛野豊氏撮影〕

\*\*\*\*\*

昭和24年当時をふり返ってみると、所属した法文学部は大阪市の中心部にあって、繁華街の心齋橋筋に程近い、旧小学校の建物であった道仁学舎を使用していた。商、経済、法文の3学部および大阪商大の旧制が合併して、狭い建物に雑居していたといってもよい。実験室は愚か、研究室も教員用の机もなかった。体育実技のためのグラウンドたるや、テニスコート一面が建物に

近接して存在するのみで、球技などをやるとボールが窓ガラスをブチ破って教室だけでなく、再三にわたり学長室にとびこむような環境であった。大学像に期待をもって奉職した気持ちが数日のうちでペシャンコになってしまったことを憶い出す。（中略）講義は教室が使えるので、どうにかなったが、実技は狭い場所で、しかも実技教員1人で100名余りの一学部全学生を担当させられたのには、結果として、よくやれたものだと、今、考えてみるとわれながら関心と寒心が交互に到来したものである。（中略）

実技教育上、苦勞したのは、理工学部（医学進学課程を含む）のある扇町学舎の環境条件で、道仁学舎よりさらにひどく、グラウンド、体育館は無きに等しかった。止むを得ず、近くにある扇町公園の広場の一部を使用して実技教育を行ったが、場所使用については、市民のための公園であるので独占使用は許されず、授業日の朝は早朝6時頃より広場の一部に実技用具を置き、教員自らが張番をして優先使用を久しきにわたり、実施してきたことを記憶している。

広場使用ができないときは、遠路をいとわず、本学の桜宮艇庫に赴き、レガッター訓練を実施したことも憶い出す。（中略）

その後、道仁学舎は鞆学舎に移転して、ここでも、また、道仁学舎同様の苦難の道が実技活動に引継がれたが、昭和27年頃より米軍の杉本町校舎撤兵に伴ない医学部を除く各学部は杉本町学舎へ集結するための移転が始まった。（中略）

保健体育、とくに実技教育について黎明期がやってきたと感じたのは、この頃からである。

\*\*\*\*\*

（『大阪市立大学保健体育学研究紀要』第18巻（昭和58年3月31日）より）

## ■創造都市研究科

### 創造都市研究科の誕生と発展のあゆみ

#### 新大学院・創造都市研究科設立の胎動—社会の変化と新大学院設置

創造都市研究科の公式的原型は、新夜間学部・大学院設立準備検討委員会が1996年12月9日評議会に提出した「大阪市立大学『市民大学センター』・『都市政策研究科』・『市民大学プログラム』の設置について」であり、①既存の夜間課程（第2部）の改革、②大学

院新研究科の創設、③生涯学習を目的にした新組織の設置という3つの目標が掲げられた。

新夜間課程・大学院設立準備検討委員会は、1997年11月17日の「大阪市立大学都心新施設群の設立・整備について（中間報告・案）」で、新大学院は北区堂島小学校跡地に、大阪市教育委員会の総合生涯学習センターと併設して実現することを提起した。

この案に沿って様々な新大学院構想が議論されたが、顕在化しつつあった大阪市の財政難の状況を考慮し、1999年3月15日の評議会で、既存方針の大幅な見直しを決定。2000年2月21日の同委員会では、経済研究所の教員枠20名を基盤にしつつ、それに15名を加えるという、新たな構想が浮上した。

### 創造都市研究科の基本構想—社会人のための大学院

経済研究所が参加を表明したため、2000年4月以降、新大学院の骨格作りが急ピッチで進んだ。まず「高度専門職業人の養成を主眼に置く」、「社会人を中心とする」、「新夜間大学院」といったキーコンセプトが提起された。

同年7月17日の評議会で、「都市ビジネス」、「都市・地域政策」、「都市情報」の3専攻が提起された。これは、すでに独自に出されていた学術情報総合センターの教員組織による新大学院構想との統合を図ったものであった。その結果、教員数では専任教員47名+ $\alpha$ 、学生入学定員も約100名程度と、大規模な大学院構想が生まれた。

新大学院が養成する人材像は、ベンチャー起業家、自治体職員や地方議会議員、都市・地域政策専門家、都市政策領域を担当するシンクタンク研究員、情報システムや情報メディア分野の指導的な人材、都市関連に強みを持つ企業の人材、高度専門職業人を目指す留学生などとされた。

ここに、大都市大阪の再生と創造的な発展を担う人材育成という、既存の研究科にはないまったく新しい大学院構想が誕生した。

### 創造都市研究科の組織作り—既存組織の抜本的な再編

2001年になり、新大学院の組織作りは、大阪市立大学の既存組織の抜本的な再編を伴う形で進展する。新大学院の専任教員は、既存の経済研究所、学術情報総合センター（教員）、人権問題研究センターの3つの機関の教員定員を基幹とすることになった。さらに、新大学院の専攻構成にふさわしい専任教員10数名の確保の努力が重ねられた。

また、2001年3月までは仮称で都市政策研究科、同

年7月には都市再生研究科などと呼ばれた後、2002年初めには創造都市研究科と名称が定められた。この名称に関しては、市民が創造性を発揮できる「創造都市」の形成とその連携をユネスコが支援しており、都市の課題に取り組む本研究科も、そのような理念に沿った都市づくりを指向しようという意見が決め手となった。

『「創造都市」への挑戦』（第23回大学史資料室展示）より



(図16) 創造都市研究科 (2003年4月開講) 学生募集のポスター

○今回の展示に際し、以下の大学史資料室運営委員の協力を得ました。

西倉高明 (経営)、大島真理夫 (経済)、恒光徹 (法)、塚田孝 (文)、升本眞二 (理)、向井孝彰 (工)、三木幸雄 (医)、小池志保子 (生科)、李捷生 (創都)、渡辺一志 (都市健康スポーツ)、小山田浩子 (看護)、安竹貴彦 (前身校・全体統括) ※ ( ) は担当部分。

大阪市立大学 大学史資料室

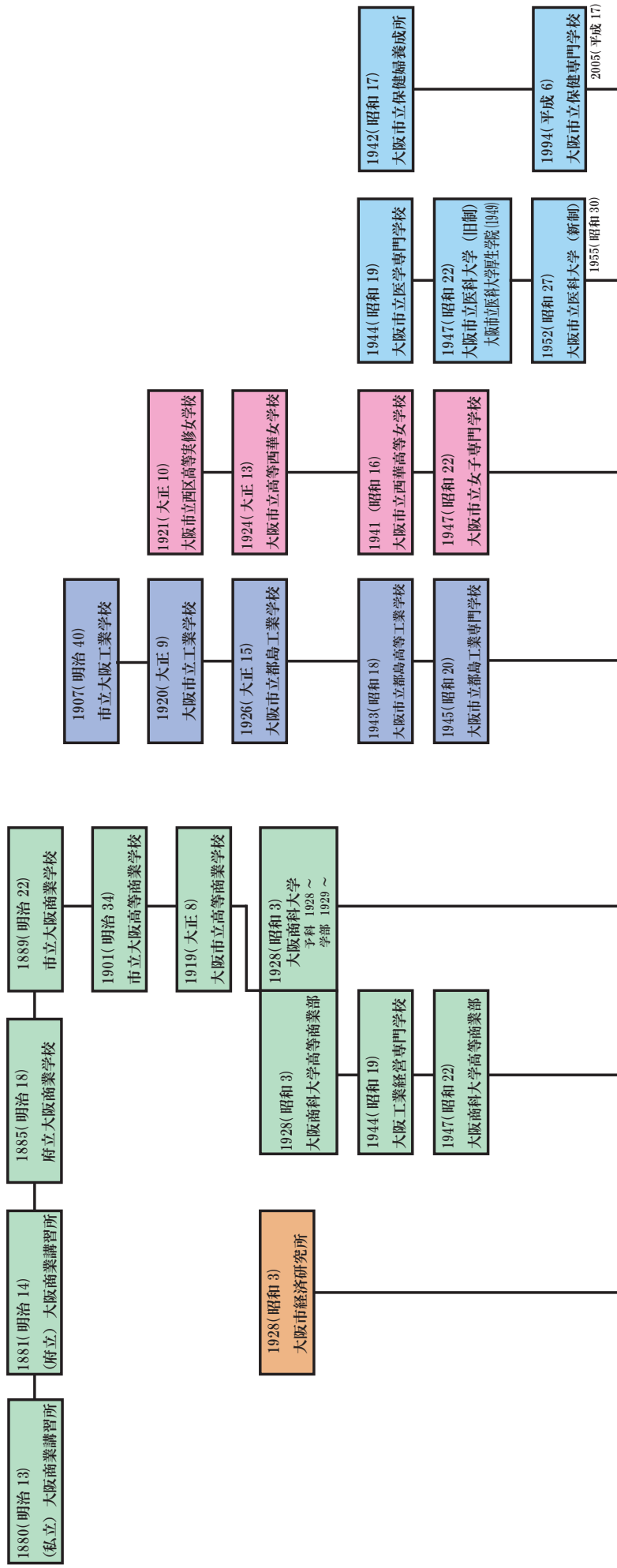
〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

学術情報総合センター 6階

Tel 06-6605-3371 Fax 06-6605-3372

E-mail archives@ado.osaka-cu.ac.jp

# 大阪市の沿革



## 1949 (昭和24) 年 大阪市立大学 (新制)

## 2006 (平成18) 年 公立大学法人 大阪市立大学

### 【2013(平成25)年現在の組織】

- 大学院・学部
  - 経営学研究科・商学部
  - 経済学研究科・経済学部
  - 法政学研究科・法学部
  - 文学研究科・文学部
  - 理学研究科・理学部
  - 附属植物園
  - 工学研究科・工学部

### 【部局等の主な変遷】

- 1953(昭和28) 法文学部を法学部・文学部に分離
- 1959(昭和34) 理工学部を理学部・工学部に分離
- 1969(昭和44) 原子力基礎研究所設置(1989廃止)
- 1975(昭和50) 家政学部を生活科学部に改称
- 1998(平成10) 看護短期大学部設置(2007廃止)
- 2003(平成15) 創造都市研究科設置
- 2004(平成16) ロースクール(大学院法政学研究科法曹養成専攻)設置
- 医学部看護学科設置
- 2006(平成18) 経済研究所廃止
- 2008(平成20) 看護学研究科設置

### ■ 図書館・情報処理センター 学術情報総合センター

医学分館

### ■ 教育研究組織・附属施設

- 都市健康・スポーツ研究センター
- 人権問題研究センター
- 大学教育研究センター
- 都市研究プラザ
- 人工光合成研究センター
- 複合先端研究機構
- 英語教育開発センター
- 証券研究センター
- 新産業創生研究センター

- 文化交流センター
- 基礎教育実験棟
- 杉本地区R施設
- 工作技術センター
- 大学史資料室
- 恒藤記念室
- 保健管理センター
- ゲストハウス
- 田中記念館
- 高原記念館
- 地域連携センター
- 国際センター